

*Tarzan of the Apes* にみる男性性の再活性化  
— 「野性」を母とするサバイバル戦略

吉 田 純 子

## Summary

### Revitalizing Manhood in *Tarzan of the Apes*: A Survival Strategy of Having Mother "Wilderness"

YOSHIDA, Junko

No serious literary critics have counted Edgar Rice Burroughs' novels as canonical American literature. However, in the light of Cultural Studies, we should not overlook the contribution his works have made to the American culture. In this paper I reread *Tarzan of the Apes* from the perspective of Gender Studies, specifically focusing on the protagonist's masculinity, while placing the novel in the American socio-cultural context at the turn of the twentieth century.

Tarzan's father, Lord Greystoke John Clayton, resolves to become a "primeval man" and expects his wife Alice to be a "primeval woman" when they are deserted and are forced to survive in the African jungle. However, infant Tarzan is taken away from him as a changeling by Kala, a female Ape, and is nurtured by her wild but genuine mother's love. After her death, Tarzan attains his primeval manhood and comes into the kingship of the Apes.

Sociologist Anthon E. Rotundo calls this new type of manhood "passionate manhood" which puts higher value on physical strength than mental strength. This type was first shaped by the Civil War, and then nurtured by Darwinism in the late nineteenth century. In this socio-cultural environment men spoke of their masculine nature using phrases like "animal instinct" and "animal energy." At the root of the change was "masculine anxiety," and in response to it, various institutions enlightened and educated adolescents. For instance, baseball and the Boy Scout of America were utilized to invigorate American manhood. Also, the discourse on revitalizing manhood was most pervasive in President Theodore Roosevelt's speeches. For him, "strenuous masculinity" was a key force in expanding the American Empire. It was within the same socio-cultural context that Burroughs created Tarzan as "the personification of the primitive man" and the audience accepted it.

Tarzan encounters his match, Jane Porter who later transforms into a "primeval woman." However, at the end of the novel she engages herself to Cecil Clayton, a civilized Englishman. The only remedy for Tarzan is to articulate that his mother was an Ape, despite verification of his heredity from his fingerprints. Thus, his words "My mother was an Ape" has become the strategy not only for Tarzan himself but also for every audience who is mesmerized by Tarzan's masculinity and who also needs to survive in the industrialized, competitive, and complex modern world.

「あなたはいったいどうしてあのようなジャングルに住むことになったのですか」

「ぼくはあそこで生まれたのです」と、ターザンは静かに答えた。

「母は類人猿でした。…ぼくは自分の父がだれか知らないのです」

『類猿人ターザン』より

#### ◆ はじめに

Edgar Rice Burroughs (1875–1950年) の *Tarzan of the Apes* は、パルプ・マガジン 大衆雑誌 *All Story Magazine* に1912年に発表された後、1914年に単行本として出版され、その後26冊にも及ぶ「ターザン」シリーズの第一作となった作品である。「ターザン」シリーズは、娯楽小説としてばかりか、1917年の *The Lad and the Lion* に始まり、Johnny Weismuller 主演の映画を含め、1999年のディズニー・アニメーション映画の *Tarzan* まで、50本以上の「ターザン」映画を生み出してきた。その他に、テレビ、ラジオ、漫画版の「ターザン」シリーズもあり、多様なメディアを通じて、過去90年間のアメリカ人の文化に「ターザン」ものが浸透してきた。こうして、バロウズは、アメリカ文学の正典カノンの殿堂入りこそ果たせなかったものの、アメリカの大衆文化の中で不動の地位を築いた。批評家 Everett Franklin Bleiler は、この作品が「エロティシズムと力のファンタジー」であり、過酷な環境に無防備で無力な状態で投げだされた負け犬の少年が、自らの男らしさを示して権力の頂点をきわめ、原始林でギブソン・ガールタイプの娘を手にいれる話だと評している (Bleiler 63)。しかし、『類猿人ターザン』が過去90年間にアメリカ文化に与えた影響を考えると、単に「エロティシズムと力」だけを売り物にしたファンタジー作品として一蹴しがたいものがある。

文化論としての「ターザン」論のなかで、アメリカ研究家亀井俊介の『サーカスが来た!』(1976年)と『アメリカン・ヒーローの系譜』(1993年)、児童文学批評家 Jerry Griswold の『家なき子の物語』(1992年)は、とりわけ示唆に富む。『サーカスが来た!』は、バロウズの描く原作ターザンを、「アメリカ人が好んで描く理想的な人間像」、つまり「アメリカのアダム」の系譜において眺め、さらに『アメリカン・ヒーローの系譜』は、これを踏まえたうえで、ターザンが Frederick Jackson Turner による1893年のフロンティア終結宣言 *The Significance of the Frontier in American History* (Turner 26) に応えるかのように、「大自然に原初的な生命をくりひろげながら、なおかつ理想の世界を建設するという本来的な夢」(亀井 1993, 322)をアメリカに求め、フロンティアが「海を越えた」(322)と主張する。他方、グリスウォルドは、ターザンが「原始人としての子ども」であり、「フロンティアとしての子ども」(Griswold 131–33)でもあると主張する。前者のターザン像は、アメリカの経済恐慌のさなか、弱肉強食のシカゴの「ジャングル」でターザンを書いたバロウズが、ダーウィンの進化論の一モデルとして類人猿から人間に進化するターザン少年を描いたという意味であり、後者は、文明／荒野という二項対立的な世界観のなかで「荒野へ逃亡」する若者の夢が、フロンティアとしての子ども

というターザン像に表象されているという主張である。バロウズの描くアフリカは、したがって、フロンティアの夢を露骨に具現したものであるということになる(134-35)。

本稿では、亀井やグリスウォルドのこうしたターザン論を踏襲しながらも、彼らが特に関心を払わなかったターザンの男性性に焦点をあてて、アメリカン・ヒーローの系譜に属するターザン像を、その構築時期の社会・文化的文脈において読み直してみたい。なお、作品分析は、第一作『類猿人ターザン』に限定して行う。

#### ◆ アメリカのアダム

文芸批評家 R.W.B. Lewis は、*The American Adam* (1973) において、アメリカ神話に登場する純真無垢な孤高のヒーローを「アメリカのアダム」と命名した。ルイスによれば、1825年から1850年までに、ニューイングランドと大西洋沿岸地方で活躍した白人男性の思想の代弁者たち(随筆家、批評家、歴史家、説教者、文学者)が、アメリカ人の新しい自己イメージについての対話的言説を通じて、しだいに「アメリカのアダム」像を生みだしていったというのである。ルイス曰く。

アメリカ神話は集合的なものであったし、その点ではその後もかわりはない。論文、詩、物語、歴史、説教など、色とりどりの文献から取り出して繋ぎ合わさなくてはならないものなのだ。(中略) アメリカ神話の描いた世界は、人類にとっての第一の機会がたそがれの旧世界のなかで悲惨な失敗に終わったのち、第二の機会が神から与えられて、新しい主導権のもとに再出発した、というものであった。アメリカ神話は新しい種類のヒーローを作りあげた(略)。(Lewis 8-9、傍点は筆者による)

言いかえれば、様々な書き物が、「アメリカのアダム」をヒーローとするアメリカ神話をこぞって構築してきた、というのである。新しいヒーロー像には共通する属性があった。彼は、家庭や社会のアウトサイダーで、無垢な心を持ち、成長過程の儀式的な試練を通過して、未知の複雑な世界に希望の第一歩を踏み出す若者なのだ。彼は過酷な試練のなかで、ときには打ち負かされ、裏切られ、捨てられ、破滅させられる。

彼はこの世界に徹底的に影響を与え、また徹底的に影響を受ける、(略)しかし彼は自分のしるしを世界に残してゆく、そのしるしのために生き残った人びとにとり、征服がのちに可能になるかもしれない。(Lewis 190)

文化論的な観点から興味深いのは、この純真無垢の孤高のヒーローが社会の人々に影響を与え、彼らからも影響を与えられ、さらに、自分のしるしを社会に残し、後世の人々がそのしるしを再生する様である。ルイスのこの言葉を言いかえれば、「アメリカのアダム」の神話は、様々な書き物をとおして集合的に構築され、またテキスト間交流を通じて伝播する、というこ

とだ。それは、「純真無垢の孤高のヒーロー」という意味が「アメリカのアダム」の表象に記号化された後に、様々なテキストの間を記号化、脱記号化をくりかえしながら、アメリカ文化のなかで累々と継承されてきたということにほかならない。

では、アメリカ人は、なぜ無垢なる孤高のヒーロー像を創出・継承してきたのだろうか。かつて、白人・アングロサクソン・プロテスタント（WASP）の男たちが、腐敗にまみれたヨーロッパの旧世界と決別して新しい国を築いたときに、建国の神話を必要とした。彼らは、エデンの園の汚れなきアダムのイメージにならぬ、新大陸「エデンの園」で「アメリカのアダム」を主人公とする新しい神話を創出する必要があると感じた。亀井俊介は、Dixon Wecter の説を借りて次のように説明する。移民してきたアメリカ人は、新大陸で根を切られた生活をはじめたために「不安定な国民」となり、集団のシンボルである「アメリカのアダム」を生みだして生き延びようとしてきた。しかも、亀井によれば、多人種国家であるがゆえの不安感が、なおさら国民を束ねるシンボルを必要としたのである（亀井 19-20）。

さらに、宗教社会学者 Walter T. Davis は、集団のシンボルを主人公にいただくこの物語を「アメリカの物語」と呼び、家父長国アメリカが、代々この物語にもとづき国家アイデンティティを形成し、国際世界での自らの役割を確認してきたと主張する。しかも、この物語には二つのわき筋がある。第一は、アメリカが正義と豊かさを追求する自由と民主主義の国家であるという筋書きであり、第二は、アメリカ人がこの筋書きどおりに生きるために、世界で「選ばれた民」として「明白なる天命」を負っているという筋書きである。デイヴィスは、後者を「アメリカ例外主義」、あるいは「アメリカニズム」と呼ぶ（Davis 26）。

このようなイデオロギーや記号の意味内容は、どのように若者に教化されるのだろうか。児童文学批評家 Roberta Seelinger Trites は、近代社会の諸制度が Ideological State Apparatuses（思想的国家機構）という大衆のイデオロギー教化システムとして作動するというフランス哲学者 Louis Althusser の理論を、思春期文学に援用する。もし児童文学や思春期文学が近代社会のためにという大義名分のもとに、思春期の若者を社会的に構築する一翼を担うとすれば、そのような文学は、「思想的国家機構」として機能している、というのである。とくに、「子ども」“childhood”に特別な関心を寄せていた19世紀後半から20世紀転換期にかけてのアメリカ社会では、児童文学という「制度」がイデオロギー教化システムとして作動していたと考えられる。裏を返せば、若者向けの文学に表象される「アメリカのアダム」像を検証すれば、近代社会の必要とする「男らしさ」の概念がどのようなものであるのかが分かる。

グリスウォルドは、19世紀後半から20世紀半ばにかけて白人作家により書かれた12冊の古典児童文学に、純真無垢な子どもが悪徳や矛盾にみちた「大きな世界」に直面し、苦悩の試行錯誤のすえ、ついには自らの汚れなき魂を賭けて「世界」と渡りあい、折りあい、「成長」をとげるといふ基本パターンを見出し、これを「物語原型」“ur-story”と呼んだ（Griswold 14）。主人公は、たいていの場合、成長とひきかえに無垢を喪失し、子ども時代の終焉を迎える。子どもはついには自分をとりまく社会に「めでたく」加入する。グリスウォルドの物語分析をみれば、これらの12話が子どもの社会化の一翼を担う「思想的国家機構」の機能を発揮しているこ

とは明らかである。

しかし、アメリカの物語を国家レベルでマクロに考えれば、アメリカは、旧世界の悪徳と決別して自らを「汚れなき国家」と規定したはずなのに、「成長」するために標章である「無垢」を失わねばならないことになる。アメリカの物語は、このような矛盾を抱え込んだまま、少年を主人公とする「父・息子の物語」という体裁をしばしばとって流布させられてきた。『類猿人ターザン』は、まさにこの「父・息子の物語」に属する。以下でそのプロットを追ってみよう。イギリス人の Lord Greystoke の John Clayton は、新妻 Alice を伴ってアフリカに植民地担当官として赴任する航海途上で水夫の反乱に会い、アフリカの西海岸に置き去りにされる。この地で、彼らの一人息子 Tarzan は誕生するが、両親の死後、類人猿の養母 Kala に育てられ、ジャングルで成長する。思春期を迎える頃、彼は、偶然父親の住んでいた丸太小屋を訪れて、そこではじめて文明の品々に出会い、人間としてのアイデンティティに目覚めはじめる。彼は、やがて、ジャングルでの生存競争で次々と勝利をおさめ、類人猿の王者となる。だが、後に、同じく謀反を起こした船員によりこの地に置き去りにされた白人の一行と出会い、その一員のアメリカ女性 Jane Porter を愛するようになる。さらにその後、彼は、ポーター教授たちの捜索にきたフランス人 Paul D'Arnot 中尉を人食い人種の黒人たちから救出し、看護したことから、中尉と親交を深めフランス語を学び、後に中尉とともにフランスに渡る。短期間のうちに、フランス語と英語をマスターし、文明的な振る舞いを身につけたターザンは、ジェーンを追ってアメリカのウィスコンシンにやってくる。そして、アフリカで得た財宝を手みやげにして、父親の借金のために Canler との結婚を迫られているジェーンを救出する。しかし、大団円において、ジェーンは、類猿人のターザンの求愛を退け、彼の従兄弟のグレイストーク卿と婚約する。失意に沈むターザンは、指紋の照合によってグレイストーク卿の息子であることが証明されたにもかかわらず、爵位と財産の相続権を主張せず、ジェーンの婚約者のグレイストーク卿に、自分の母は類人猿で父親のことはまったく分からないと告げるところで物語は終わる。

#### ◆ 『類猿人ターザン』の性役割

まず、『類猿人ターザン』に表された性役割を確認する。ターザンの父親、ジョン・クレイトンは、新婚三カ月でイギリス領アフリカの植民地担当官に任命され、アリスをともなって任地に赴く。男としてのクレイトンは、次のように叙述されている。

Clayton was the type of Englishman that one likes best to associate with the noblest monuments of historic achievement upon a thousand victorious battlefields—a strong, virile man—mentally, morally, and physically. (Burroughs 16)

クレイトンの男性性は、「幾多の戦場で歴史的勝利をおさめた武将」を連想させる肉体的強靱さを見せながら、「精神的、道徳的な強靱さ」という特性をも合わせもつ。また、彼は、航海中に水夫の反乱事件に出会い、残酷な殺戮場面を目撃するが、このとき、内心はともかく、ま

るでクリケット試合を観戦するかのように、冷静にパイプをふかしながらその様子を眺めるほどの感情抑制力をもつ (27)。さらに、アフリカの見知らぬ海岸に置き去りにされたときは、人類の祖先が原始時代にジャングルで生き延びたように、自分たちもそれができるはずだと、妻を説得する (32)。このように、彼は、非常事態に直面しても、感情を抑制し平常心を保ち、追いつめられれば、ジャングルで生き延びるために、自らのうちに闘争心をかきたてる強さを持つ人物である。

一方、妻のアリスは、ヴィクトリア朝の理想的な女性の典型として描かれる。ジャングルで生き残ろうと励ます夫ジョンの言葉に、彼女は、“I will do my best to be a brave primeval woman, a fit mate for the primeval man.” (33) と答えるが、実際は原始時代の生活に耐えきれないでいる。彼女の人生で最大の危機は、類人猿に襲撃された夫を助けようとして、銃をとったときに訪れる。“She had always been afraid of firearms, and would never touch them, but now she rushed toward the ape with the fearlessness of a lioness protecting its young.” (39) アリスは、こうして「雌ライオンの剛胆さ」を身にまとって類人猿と対決し、銃を発射して夫を窮地から救いだす。しかし、夫の望む「原始の女」“primeval woman”に到達したかに見えた次の瞬間、彼女は、正気を失い、ロンドンの家に帰りついたという妄想のなかに逃げこむ。その後、彼女は、ジャングルの小屋でターザンを出産し、ターザンが1歳の頃に亡くなるが、ついに現実の世界に戻ることはなかった。

アリスのはかない人生は、何を意味するのか。それは、彼女の半生の軌跡に暗示されている。彼女は、クレイトンの新妻として、はるばる危険な旅をして、文明の「外部」にあるアフリカに連れてこられたが、その地で彼女が成しえたことといえば、発狂という自己犠牲を払って夫を救出し、自己喪失のままターザンを1歳まで育てあげたことである。また、見逃してならないのは、アリスの自己喪失が、銃の発砲という男の領域への侵犯行為の直後に起きたことである。こうしてアリスは、ヴィクトリア朝イギリスの理想的な女性役割「家庭の中の天使」を演じきって、短い人生を閉じる。彼女の「天使」ぶりは次のように描写される。

... though she lived for a year after her baby was born, she was never again outside the cabin, nor did she ever fully realize that she was not in England ...

In other ways she was quite rational, and the joy and happiness she took in the possession of her little son and the constant attentions of her husband made that year a very happy one for her, the happiest of her young life. (40, 下線部は筆者による)

言いかえれば、アリスは、文明の「外部」にいるという現実を拒否し、「原始の女」としてではなく「家の中の天使」として、妄想のイギリスのなかで、夫と子どものために献身的な「幸せな」人生を送った。すれば、ヴィクトリア朝の理想の女性性を体現する彼女が文明の「外部」と「内部」を同時に体現することなど、所詮自己矛盾であり、正気の沙汰ではなかったのだ。

◆ 「野性」を母とする少年

『類猿人ターザン』が「父・息子の物語」である所以は、パートナーに「原始の女」たれと願う父親ジョンの意志が、息子ターザンに継承される点にある。「天使」アリスの没後まもなく、ジョンは丸太小屋で類猿人に襲撃され殺害される。このとき、類猿人の族長の妻カラは、ゆりかごの赤ん坊ターザンと最近死んだばかりのわが子の亡骸を取り替え、この後、ターザンを成人するまでわが子として育てる。それは、「原始の女」カラが「天使」のアリスにすり替わり母親となったという意味である。父親ジョンは、文明の「外部」で生き延びるためには、原始時代の「野性」が必要だと考えたが、息子ターザンは、カラとの出会いによって、後にはジェーンとの出会いによって、くしくも父親の願いを成就する。

では、なぜ野生動物を母とする設定がなされたのかと言えば、作品のそこかしこにみられるダーウィンの進化論の影響がその答えの一つとなるだろう (Griswold 127-28, Holtmark 47-48)。たとえば、ターザンの前半生には、太古時代から現代文明に至るまでの、人類の進化が圧縮され表現されている。ターザンが自分の生まれた丸太小屋を訪れて、自らのルーツに出会う10歳の頃から、自己教育を通じて心身ともに強健な若者に成長して、ついに森の王者となる18歳の頃までのめざましい成長ぶりは、進化する人類の理想像をあらわしている。彼が誕生の地で父親の形見のナイフや児童書、入門書、辞書といった文明の品々にふれながら、独学を重ねるようすを、テキストは次のように描写する。

Squatting upon his haunches on the table top in the cabin his father had built—his smooth, brown, naked little body bent over the book which rested in his strong slender hands, and his great shock of long, black hair falling about his well-shaped head and bright, intelligent eyes—Tarzan of the apes, little primitive man, presented a picture filled, at once, with pathos and with promise—an allegorical figure of the primordial groping through the black night of ignorance toward the light of learning. (67, 下線部は筆者による)

かつて父親が建てた丸太小屋で文字を独習する類猿人ターザンは、「無知という夜の暗闇から知識という光のなかへ手探りで進む原始人」を寓意的に表したものだ、というのである。

思春期のターザンが「進化・発達」する様子を、いま少し詳細にみてみよう。この後ターザンは、12歳で鉛筆をみつけて習字の練習をはじめ、17歳の頃には児童書の読み書きができるようになっていた。こうして、文字を習得したターザンは、自分が他の類猿人とは異なる種であることを自覚する。そして、彼は、思春期の少年の心理発達のハイライトをなす父親とのエディプスの闘争を、13歳のとき経験する。彼は、養母カラを救うため、それまで最大の敵であった類猿人の義父 Tublat を、文明の利器ナイフで刺殺する。それは、くしくも類猿人のダムダム祭りの日に起こった。



As the body rolled to the ground Tarzan of the Apes placed his foot upon the neck of his lifelong enemy and raising his eyes to the full moon threw back his fierce young head and voiced the wild and terrible cry of his people. . . .

“I am Tarzan,” he cried. (77)

こうして彼は、思春期の危機を通過し、「ターザン」(類人猿語で「白い肌」という意味 (52) としてアイデンティティを確立する。

この後、ターザンは、雌ライオンのサボアの征服に執念をもやすのだが、それは、裸体をサボアの毛皮で被いたいという、衣服への欲望に起因していた。イギリス人としての彼は、人間が動物とは違い衣類を着ていることを、絵本から学んで知っており、“*Clothes. . . must be truly a badge of greatness: the insignia of the superiority of man*”(79) と考えている。その一方で、彼は、窮屈で奇妙な衣類をつけず裸で暮らしたいとの願望ももっている。こうして、成長期の最終段階にいるターザンの描写は、文明と野性が奇妙に混交したものとなる。すなわち、彼は、長年の独学独習のかいあって、“an English lordling, who could speak no English, and yet who could read and write his native language”(85) であり、類人猿の王カーチャクを父の形見のナイフで刺し殺し、類人猿の王者となったイギリスの貴公子である。この意味で、“And thus came the young Lord Greystoke into the kingship of the Apes.”(111) という一文ほど、ターザンのもつ「文明」と「野性(野生)」のハイブリッド性を示すものはない。このハイブリッド性を亀井は、Fennimore Cooper の *The Pioneers* (1823年) に登場する神話的人物 Natty Bumppo の「高貴なる野人」“noble savage”と結びつけ、ターザンが「アメリカン・ヒーローの系譜」にあることを主張する(亀井 1976, 260)。なるほど、歴代のアメリカン・ヒーローが野性と文明、自然と文化、非白人と白人のインターフェースあるいはフロンティアとして、葛藤状態を生きてきたことは、数々の文学テクストが示している。たとえば *Adventures of Huckleberry Finn* (1884年) は、もうひとりのハイブリッド的人物 Huckleberry Finn が同じくハイブリッドであった Injun Joe の死によって6,000ドルの財産を入手したのち、文明の拘束と野性の自由のあいだを往復しながら、ついには「インディアン準州にずらかる」“light out for the Territory”(つまり野性の自由へと逃走する) アメリカン・ヒーローの物語を展開している。しかし、20世紀初頭にバロウズの構築したターザンのハイブリッドな男性性が、どうして長期にわたり大衆文化に根を下ろすことになったのかは、掘り下げて考えてみる必要がある。

#### ◆ 男の闘争本能

20世紀に流布する男性性の概念は、19世紀後半に白人中流階層の男性のあいだに生じた新しい価値観やこだわりを反映しているという説がある。その頃、ある種の男性性の価値観においては、精神よりも肉体の強さに比重がおかれ、男性性の原始的源泉にあらたな関心が向けられるようになった。社会学者アンソニー・ロランドが「情熱的男らしさ」“*Passionate Manhood*”と呼ぶこの種の男性性概念は、それ以前の伝統的タイプが精神的強靱さに重きをおいたのとは

対照的に、「強い身体に強い心が宿る」という考えを通り越えて、頑強な肉体こそ頑強な精神そのものであるという、肉体中心主義の考え方に立っていた。しかも、進化論の影響下で、「男の〈動物的本能〉が肯定的にとらえられ、男は進んで自分たちを〈原始人〉にたとえた」(Rotundo 227)。そして、男は自然のなかで身体を鍛え、原始的な闘争本能に目覚めれば、強い肉体すなわち強い精神を得られる、といった考えが流布する。この種の男性性は、20世紀にはいっても影響力が衰えるどころか、かえって男たちの心を呪縛していった。この男性性概念の背景には、生存が闘争であるという考えが横たわっている。人生を闘争の場とする男の考え方の形成に、南北戦争(1861-65年)が関わったことは間違いない。その後、広く流布したダーウィン主義によって、一般の人々のあいだにも「原始人」への熱狂的関心が増した。ダーウィン人気が去った後も、たとえばJack Londonの*The Call of the Wild*(1903年)にみられるように、動物のメタファーが一般の関心を集めた。こうした社会環境のなかで、男性は「動物的本能」「動物的エネルギー」といった言葉を、男の特性を表現するのに使った。バロウズがターザンを「原始人の化身」「A personification. . . of the primitive man”(122)として描いたのは、こうした社会・文化的文脈においてであった。

このような男性性の誕生の背景には、19世紀後半から世紀転換期にかけて、「男性性の危機」“the crisis of masculinity”(Kimmel 57)や「男性性の不安」“masculine anxiety”(Hantover 75)があった。端的に言えば、当時、急激な社会変化に対応しきれない古いタイプの男性性を体現する男たちのあいだで不安が生じ、その一方で、「軟弱」になった若者を批判する声が拡大していったのである。歴史家ターナーによる1893年のフロンティア消滅宣言が表象するように、開拓者に体現されてきた独立独歩で精神的強靱さを旨とする男性性の概念<sup>1</sup>が、しだいに社会で居場所を失い、それとともに、急速な産業化が男たちと仕事の関係をも変えていった。また、都市部での活力にみちた移民の増加や、第一次女性運動と女性の職場進出も、白人男性の性アイデンティティを脅かしていた。さらに、職場環境の変化に加えて、男性性の「女性化」“feminization”と呼ばれた現象も無視できない。男女の性役割を規定する「分離の領域」“separate spheres”の考え方が徹底した結果、少年たちは家庭でも学校でも女性により教育を施されることが多くなり、そのために少年が女性の価値を刷り込まれて成長するのでは、と懸念されるようになった。ロタンドによれば、「19世紀末には、女々しい男への不安が重大な文化的問題となった。(略)男たちは、自分たちを硬派の男性的タイプと、軟派の女性的タイプに類別しはじめた」(Rotundo 265)。そればかりか、男性的タイプ(ターザン・タイプ)と女性的タイプ(セシル・クレイトン・タイプ)が葛藤する文化的価値として、一個人の男性心理のなかでも存在していたのである。

このような「男性性の不安」を克服しようとする努力は、第26代大統領Theodore Roosevelt(1901-09年在任)の言説に顕著に表れている。歴史家Mary Beth Nortonらによれば、ローズヴェルトは、

大統領という威厳のある風貌に欠けていた。彼は五フィート九インチあったが、背が低

くみえた。また、極度の近視で、金縁の眼鏡がなくてはどうしようもなかった。(略) 青年期はぜんそくで苦しんだ。しかし、生涯を通じて彼は、自分の肉体的限界を克服し、彼や同時代人がいうところの男らしさなるものを発揮したいという妄想のようなものに駆り立てられた。(Norton 133)

ローズヴェルトは、男たるもの人生を闘争の場と考え、奮闘の努力を惜しむなど、機会あるごとに説いた。そして、彼は「戦争」“war”という語を「奮闘」“strife”と同義語的に用い、闘争の場である人生で勝ちぬいてこそ、まことの「男らしさ」を証明できると、次のように主張した。「この国は戦争を必要としている。戦争かそれに類する仕事で果敢に業績をあげた男こそ、国家から最高の栄誉を受けるに値する。(略) われわれは、まことの男らしさにふさわしい鉄の資質が必要なのだ」(Roosevelt 257)。「テディ」の愛称で親しまれたローズヴェルトのこうした主張を許す社会の背景には、若い男性の「女性化」の潮流をくいとめるために、若者を「戦争状態」において、奮闘、闘争させようとする意図が見えかくれする。こうして戦った若者は、「すばらしいきわめつけの勝利を勝ちとる」(qtd. by Gerzon 51) はずだった。

また、ローズヴェルトの言説において、男性個人の奮闘は、国家アメリカの奮闘という意味に拡大解釈された。共和国アメリカの男性性の頑強さは、個々の男性の頑張りにかかっていたのである。ローズヴェルト曰く。

奮闘することが正しいというのなら、国の内外を問わず、道徳的な意味でも肉体的な意味でも、奮闘から尻込みしてはいけない。なぜなら、奮闘してはじめて、困難と危険をともなう努力をしてはじめて、まことに偉大な国家となる目標を、ついには獲得するからだ。(Roosevelt 20-21)

さて、『類猿人ターザン』に話を戻すと、肉体的な奮闘を通じて、「すばらしいきわめつけの勝利」を勝ちとったターザンは、勝者にふさわしい身だしなみに気を配りはじめた。彼は、ムボンガの部落の黒人の衣類を奪い、人間らしい身繕いを整える。こうして彼は、「原始人の化身」であるとともに、彼がその広い肩幅、気品のある顔立ち、美しくすんだ眼にうつる生命と知性の火の輝きゆえに、“some demi-god of a wild and warlike bygone people of his ancient forest” (122) を象徴すると描写される。後に、従兄弟のクレイトンは、ターザンを“the embodiment of physical perfection and giant strength” (140) と形容する。ターザンと同じ名字をもつセシル・クレイトンが彼を「森の神」“a forest god” (151) と呼ぶとき、いわば文明人の分身が、野性人の分身の男性性を賞揚するのである。なにしろ原始の森で、そのスタミナ、機略縦横さ、野生動物や自然の知識を駆使して、猛獣や「蛮族」の黒人を相手に孤軍奮闘する様は、まさしく神業なのだから。

#### ◆ 春機発動期のターザン

ところで、若者の成長過程にダーウィンの進化論を接合した思春期の概念は、バロウズのオリジナルな考えではない。むしろこうしたターザン像は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカ社会で誕生しつつあった思春期の若者観〔思春期の若者は身体的な変化や成熟にもとづいて社会的に規定されるという考え〕の影響を受けている (Kett 215)。この時期、思春期の概念づくりにもっとも貢献したのは、心理学者 G. Stanley Hall であろう。彼は、ダーウィンの反復説〔固体発生が系統発生を短縮したかたちで反復するという説〕を思春期の若者の成長過程にとりこむとともに (Hall 1-50)、春機発動 (puberty) のある思春期を第二の誕生であり、人格の諸要素、人生の諸相があらたに結合・構成される大変動の時期であると考えた (Hall 237-324)。したがって、赤ん坊のターザンがとりかえっ子としてカラにより連れ去られた次の章で、ターザンが10歳の少年として登場するのは偶然ではない。バロウズは、猿人から人間へと著しい変化をみせる前思春期から思春期にかけてのターザンの描写に、多くの頁を割いている。進化論的に成長をとげる思春期の若者こそ、バロウズのテーマであるからだ。

ホールは、思春期の子どもが「春機発動期」「puberty」という人生の激変期にあり、自由を制限されると「囚われの動物」みたいに「本能的反抗」をするのだから、自由な遊びを保証してやるべきだと考え、次のようにいう。

春機発動期の少年少女にとって、とくに春になると戸外は気持ちよさそうに見える。彼らは、森や野原のことをおもうと教室に閉じこもるのが辛くなり、自分たちが囚われの動物のおもえるのだ。彼らは、野性的な生活の絶対的自由につよくあこがれ、とくに著しい場合には、原始人の状態を再現しようとする盲目的な本能にしたがい、裸足になり、帽子、衣服をしばしば脱ぎすてるのである。(Hall 348)

思春期の少年の心身を鍛えるために、戸外活動を推奨するホールの提案は、青少年育成の関係者から熱い支持を受けた。ヴィクトリア朝期の社会改良家、少年の各種クラブ、YMCA、少年裁判所、隣保館セルツメントのクラブ、ボーイ・スカウト等の関係者は、ホールの思春期の概念を受け入れ、すべての階層の少年たちがチーム・スポーツ、軍事訓練、市民教育に参加できるよう、広範な活動を展開していた。

この時期、注目すべきは、「ターザン」シリーズの人気の背後に、YMCA やボーイ・スカウト運動があったことである。しかも、いわゆる「男の活気」の回復を提唱するマスキュリニストたちも、青少年育成の運動にかかわっていた。アメリカのボーイ・スカウト (BSA) は、『類猿人ターザン』の出版に先だつ、1910年に設立されていた<sup>2</sup>。この運動は、もとはイギリスの軍人 Robert Baden-Powell により1908年にイギリスで設立され、彼のボーア戦争体験にもとづく軍事訓練が活動に組みこまれた。設立の当初は、ナチュラリストの Ernest Thompson Seton もチーフ・スカウトとして参加し、YMCA、赤十字、遊び場協会、公立学校体育連盟など、青少年の育成にかかわる団体が理事会を構成していた。つまり、軍事訓練的要素と、自然のなか

で原始的な生活を体験させるナチュラルリスト的要素が混在したものだ。しかし、1915年のシートンととの決別にみられるように、BSAは戸外活動そのものをめざすよりも、本来の軍事的発想にならい、少年の心身の強靱さを高めるために、戸外活動を利用する方針をとった。

さらに、アメリカの少年たちは、産業化社会の生存競争に生き残るために、野球やフットボールなどのチーム・スポーツを通じて、文化的な意味での「戦闘訓練」を受けていた。社会学者 Michael S. Kimmel は、野球がアメリカ人男性性の再活性化に果たした役割について、次のように述べている。

男性性の活性化がはっきりとみられるのは、試合するにしても観戦するにしても、急上昇する野球人気をおいてほかになかった。野球は、世紀転換期に、男性性を立てなおすための重要な機構のひとつになったのだ。(Kimmel 59)

野球選手は自らの「男らしさ」を証明するために、業績を目にみえる形で観衆に披露する。また、プレイヤーが安全なホーム（家庭）からフィールド（戦場）に出撃し、敵の攻撃を切り抜けて安全なホームに帰還するというゲームの特徴は、生存競争の精神ばかりか、奮闘の人生に山あり谷ありといった人生哲学をも説いている（Rotundo 244）。

#### ◆ アフリカの夢の陰で

一度もアフリカを訪問したことがなかったバロウズは、事実に即さない人種的偏見に満ちたアフリカを描いた。たとえば、ターザンがはじめて目にした人間は酋長 Mbonga の率いる黒人の兵士であるが、彼らは鼻輪をつけ、入れ墨をした人喰い人種で、“Their yellow teeth were filed to sharp points, and their great protruding lips added still further to the low and bestial brutishness of their appearance.”(85) というように、彼らの風俗、風習、容貌が「野蛮さと残酷さ」の印象を醸し出すよう描写されている。この後、黒人の Kulonga がカラを殺したため、ターザンは復讐心からクロンガを殺し、ターザンと黒人の部族との関係は最悪のものになる。それ以降、彼らは、ターザンからたびたび毒矢を失敬される愚かな黒人として、あるいはフランス人のダルノ中尉を虐待する人喰い蛮族として、次のような類型的描写が繰り返される。

The bestial faces, daubed with color—the huge mouths and flabby hanging lips—the yellow teeth, sharp filed—the rolling, demon eyes—the shining naked bodies—the cruel spears. Surely no such creatures really existed upon earth—[D’Arnot] must indeed be dreaming.(211)

このように人種的偏見に満ちた描写であっても、バロウズには空想上のアフリカを描く彼なりの必要性があった。グリスウォルドの言うように、彼は、人種主義の白人男性にとっての「アフリカの夢」を、「全くどこにもない土地、心理的束縛のない自由の地帯、＜暗黒大陸＞」（Gris-

wold 134)を作り出したかったに違いない。バロウズの同時代人で *The Wizard of Oz* の作者 Lyman Frank Baum (1856–1919) が、不安感で弱体化した「男らしさ」の回復を、文明国ならざる架空の国オズにおいてはかったように (吉田 149–63)、バロウズも、文明の「外部」の「暗黒大陸」というファンタジー領域を設定して、原始的源泉から生命の水を汲み出そうとしたのである。

バロウズは、「森の神」という「高貴なる野人」の完璧な男性性を作り上げるために、白人男性の文明の「他者」を最大限活用した。「他者」としての黒人は、「残酷」で「野蛮」で「邪悪」でなければならなかった。類人猿カラは、文明の小賢しさのない、野生動物のもつまぎれもない愛と気づかいでもって、ターザンを野性的男性に育てあげたのである。さらにバロウズは、「高貴なる野人」の男性性の総仕上げとして、文明の中心から原始の森にやってきた白人のアメリカ娘ジェーンを、ターザンのために「原始の女」に仕立てあげる。

ジェーンは、類人猿ターコズの凶手から救出されたときに、“a primeval woman who sprang forward with outstretched arms toward the primeval man”(188) と描写される。何世紀もの文明と文化のヴェールが視界からふっ飛んでしまった今 (188)、彼女は「原始の男」ターザンにふさわしい「原始の女」となる。とはいえ、彼女は、ターザンの庇護なしには生きていけない無力な生き物として、彼のたくましい腕にすがりながら、バロウズの幻視するジャングルを移動する。

Presently Tarzan took to the trees, and Jane Porter, wondering that she felt no fear, began to realize that in many respects she had never felt more secure in her whole life than now as she lay in the arms of this strong, wild creature, being borne, God alone knows where or to what fate, deeper and deeper into the savage fastness of the untamed forest. (196)

ついにターザンは、父親ジョン・クレイトンの夢を実現して、「原始の女」を手に入れた。そして、彼女の眼に映るターザンは、“... one of extraordinary beauty. A perfect type of the strongly masculine, unmarred by dissipation, or brutal or degrading passions.”(195) と描写される。

さて、ジェーンは、19世紀末から20世紀初頭にかけて流布した新しい女性像の「ニューウーマン」の異型「ギブソン・ガール」である。自転車に乗りブルマーをはいて運動をする活動的な女性イメージに代表される、健康な魅力、独立心旺盛、強い意志力、旺盛な生活欲をもった「ギブソン・ガール」は、対等な男女関係を前提とする「友愛結婚」の配偶者として、白人中産階級の男たちにもてはやされた (Shneider 148; Evans 234)。だが、結局のところ、このタイプの女性も、近代的な結婚制度に回収されて、良妻賢母となって家族に貢献することになる。第一次フェミニズム運動の晩年期にあたるこの時期、アメリカでは、婦人参政権を求める運動が活発化していたにもかかわらず、実際は、1920年によく女性が選挙権を獲得した後、フ

フェミニズム運動は急速に衰退していった。彼女たちが「家庭の中の天使」と違うとすれば、自己犠牲を旨とする「天使」が覇気をなくした男たちにとって足手まといであったのに対して、彼女たちは、男の野性的側面を認識・受容し、男性性のパワーアップに貢献する点である。だが、自らの「夢」と「声」をもたぬ彼女らの人生のシナリオは空疎であり、その空疎ぶりは、ジェーン・ポーターが作品中で常に誰かの「女」として描かれるのをみれば明らかである。彼女は、最初、セシル・クレイトンの恋人として登場し、次に類人猿ターコズに陵辱されることを、ターザンに救出され彼の女となる。そして、アメリカに帰国後、父の借金返済のためキャンラーの女になろうとし、その後、ターザンに心を動かすも、再度、セシル・クレイトンの女となる。蛇足ながら、「ターザン」シリーズ第2巻 *The Return of Tarzan* 『ターザンの帰還』(1915年)で、ジェーンは、作品1冊を費やす思案の末、ついにセシル・クレイトンとの婚約を解消し(「男らしく」戦えなかった彼は、都合よく病死してしまう)、ターザンと原始の森で結婚式を執り行う。結局のところ、ターザンは、父親ジョンの夢を実現するために、アフリカの黒人を自らのネガ像として利用し、類人猿カラの「野性」をエネルギー源として搾取し、文明人ジェーンを野人である自らにふさわしい「原始の女」に仕立てたのである。

#### ◆ 集合的な夢

バロウズは、こうしてアメリカ神話の伝統に、アフリカの「原始の森」によって再活性化した「アメリカン・アダム」を付け加えることになったのだが、彼が作家業に辿りつくまでの人生をみれば、彼個人の夢がいかにターザン親子の夢と連結しているかが分かる。バロウズは、白人中流階層の出身で、健康問題から一貫した学校教育を受けられず、常に自分の居場所に居心地の悪さを感じていた。伝記作家 Irwin Porges は、15歳から16歳にかけて、新しく州になったアイダホの牧場に滞在したバロウズを次のように語る。

エド [バロウズ] は、1891年のアイダホでの短期の滞在期間に、自由でちょっぴり楽しい冒険生活を送り、その後もこのときのことが忘れられなくなる。そして、落ち着きのなさ、男としての自己表現への欲求は消えることなく、彼の未来の行動に強い影響をあたえた。(Porges 23、傍点は筆者による)

15歳から22歳のバロウズは、文字どおり「落ち着きのない」人生を送る。彼は、アイダホから帰郷後、学業に戻るが長つづきせず、ミシガン士官学校に入学し、18歳で卒業する。そして、ウェスト・ポイントの士官学校を受験するが失敗。しかたなく母校のミシガン士官学校で司令官の助手職につくが、まもなく退職する。次に、軍に入隊し、アリゾナ準州のフォート・グラントのキャンプで二等兵として軍務につく。しかし、赴任まもなく赤痢に感染し、10カ月後、健康状態を理由に除隊する。21歳で、アイダホの牧場に戻った頃、米西戦争(1898年)が勃発して、ローズヴェルト大統領の率いる「義勇騎兵隊」<sup>ラフライダース</sup>に志願するが、これにも失敗する。また、カウボーイの仕事にも違和感を抱き、故郷のシカゴに舞い戻る。

バロウズのこのような経歴をみれば、彼が文明の「外部」で味わった野性的エネルギーを自らの「男らしさ」に取りこんで、肉体的にも精神的にも強靱な男のアイデンティティを求めていたことが分かる。かくしてバロウズは、思春期の自分が求めて得られなかった「男らしい男」の夢を、『類猿人ターザン』のなかに実現した。

一個人の夢をあらわした『類猿人ターザン』は、バロウズの同時代人の野性的な男性性への渴望に応え、しかも、アメリカ神話の「アメリカン・アダム」の男性性概念を改訂しながら、ベストセラーとなった。その一方で、ローズヴェルト大統領の言説にみられるように、アメリカの帝国主義的な拡大の一翼を担う戦鬪的男性性の鼓舞にも一役買った。バロウズは、1923年にエドガー・ライス・バロウズ (E.R.B.) 株式会社を設立して、その後、複雑な組織に発展させてゆく。彼は自作を E.R.B. 社から出版させ、ラジオ番組、日刊新聞の漫画、日曜版の漫画、そしてとりわけ映画版のターザンへと、事業を拡大していった。John Taliaferro は、「ディズニーがミッキーマウスの耳を発売するずっと前に、(略)すでにバロウズは、後にマルチメディアと呼ばれるものの元祖になっていた」(Taliaferro 17) と述べている。バロウズの事業は、その後も、ターザンのキャラクター商品(人形、パン、アイスクリーム、ガム、水着、パズル)の著作権を取り、ワイズミュラーのターザン映画が人気を博していた1939年には、「アメリカ・ターザン団」(Tarzan Clan of America) を結成した<sup>3</sup>。

『類猿人ターザン』の結末部で、ジェーンが文明人のセシル・クレイトンと婚約したとき、ターザンは、自らの血統を証明する指紋照合の結果を知らされたにもかかわらず、クレイトンに向かって、“My mother was an Ape, . . . I never knew who my father was”(288) と自分のアイデンティティを言明する。「<野性>を母とする」のは、アフリカのジャングルでサバイバルをかけて闘ったターザンばかりか、ターザンの「男らしさ」に魅せられた読者で、しかも、当時のアメリカ社会の「ジャングル」で生存競争に打ち勝つ必要のあった男たちにとっても、必要な戦略だった。しかも、その後、90年にも及ぶターザン神話の存続をみれば、アメリカが国際社会で帝国主義的な拡張をつづける限り、男たちは、各時代、各人の必要に合わせて「ターザン」の意味を修正しながら、この戦略に立ち戻りつづける必要があるのかもしれない。

## 注

- 1 Mark Gerzon は、これを“Frontiersman”と呼び、Daniel Boon, Kit Carson, Wild Bill Hickok, Davy Crockettらがその代表例だとする (Gerzon 19)。一方、亀井は、ダニエル・ブーン、デイヴィ・クロケットを「開拓の巨人」のカテゴリーに入れている (亀井 1993 73-85, 99-132)。
- 2 ボーイ・スカウトの発祥の地、イギリスでは、第一次世界大戦が勃発すると、ボーイ・スカウトで軍事の「後方支援」に近い訓練を受けた若者が、勇んで前線におもむき、また銃後で、「兵士の年齢相当である15歳から17歳のスカウトには、スカウト防衛隊 (Scout Defense Force) が組織された。彼らには軍事教練と射撃術の訓練が施された」(田中 63-64)。また、『類猿人ターザン』の発表当時のアメリカでは、Woodrow Wilson 大統領 (1913-21在任) が中立主義の立場から、第一次世界大戦に参戦せず、18歳人口は、1917年の参戦まで平和な日常を過ごしていた。
- 3 この団体は、第二次世界大戦で一時中断したものの、インターネットの時代にヴァージョン・アップして復活し、ウェブ・サイトで世界に向けて情報を発信している。



## References

- Althusser, Louis. "Ideology and Ideological State Apparatuses," *Lenin and Philosophy, and Other Essays*. New York: Monthly Review Press, 1971.
- Aries, Philippe. *L'enfant et la Vie Familiale: sous L'ancien Regime*. Paris: Seul, 1960. [邦訳『<子供>の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1980年]
- Bleiler, Everett Franklin. "Edgar Rice Burroughs," *Science Fiction Writers: Critical Studies of the Major Authors from the Early Nineteenth Century to the Present Day*. Ed. E. F. Beiler. New York: Scribner, 1982.
- Burroughs, Edgar Rice. *Tarzan of the Apes*. 1912. New York: New American Library, 1963. [邦訳『類猿人ターザン』高橋豊訳、早川書房、1971年]
- . -. *The Return of Tarzan*. 1913. New York: Ballantine Books, 1990. [邦訳『ターザンの帰還』厚木淳訳、東京創元社、2000年]
- Chafe, William H. *The Paradox of Change: American Women in the 20<sup>th</sup> Century*. New York: Oxford UP, 1991.
- Davis, Walter T. *Shattered Dream: America's Search for its Soul*. Valley Forge, PA : 1994. [邦訳『打ち砕かれた夢—アメリカの魂を求めて』大類久恵訳、玉川大学出版局、1998年]
- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*. New York: Simon & Schuster, 1989. [邦訳『アメリカの女性の歴史—自由のために生まれて』小檜山ルイ他訳、明石書店、1997年]
- Gerzon, Mark. *A Choice of Heroes: The Changing Faces of American Manhood*. New York: Houghton Mifflin Company, 1982.
- Griswold, Jerry. *Audacious Kids: Coming of Age in America's Classic Children's Books*. New York: Oxford UP, 1992. [邦訳『家なき子の物語』吉田純子他訳、阿吽社、1995年]
- Hall, Stanley G. *Adolescence its Psychology and its relations to Physiology, Anthropology, Sociology, Sex, Crime, Religion and Education*. 1904. New York: D. Appleton and Company, 1911.
- Holtmark, Erling B. *Edgar Rice Burroughs*. Boston: Twayne Publishers, 1986.
- 亀井俊介、『サーカスが来た!』岩波書店、1992年。
- . -. 『アメリカン・ヒーローの系譜』研究社、1993年。
- Kett Joseph F. *Rite of Passage: Adolescence in America 1790 to the Present*. New York: Basic Books, 1977.
- Kimmel, Michael S. "Baseball and the Reconstitution of American Masculinity," *Sport, Men, and the Gender Order*. Champaign, Illinois: Human Kinetics Books, 1990.
- Norton, Mary Beth. et al. *A People and A Nation: A History of the United States*. Boston: Houghton Mifflin, 1994. [邦訳『アメリカの歴史4—アメリカ社会と第一次世界大戦』本田創造監修、三省堂、1996年]
- Porges, Irwin. *Edgar Rice Burroughs: The Man Who Created Tarzan*. Provo, Utah: Brigham Young UP, 1975.
- Roosevelt, Theodore. *The Strenuous Life: Essays and Addresses*. New Yore: The Century, 1901.
- Rotundo, Anthony E. *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. New York: Basicbooks, 1993.
- Schneider, Dorothy & Carl J. Schneider. *American Women in the Progressive Era, 1900—1920*. New York: Fact On File, 1993.
- Taliaferro, John. *Tarzan Forever: the Life of Edgar Rice Burroughs, Creator of Tarzan*. New York: Scribner, 1999.
- 田中治彦、『ボーイスカウト—二〇世紀青少年運動の原型』中央公論社、1995年。
- Turner, Frederick Jackson. *The Significance of the Frontier in American History*. 1894. Madison, Wis.: Silver Buckle Press, 1984.
- 吉田純子、『夢の国の陰で—L・F・ボームの『オズの魔法使い』』『アメリカ小説の変容』板橋好枝・高田賢一編著、ミネルヴァ書房、2000年。
- Wecter, Dixon. *The Hero in America: A Chronicle of Hero-Worship*. Toronton: U of Michigan P, 1963.

(原稿受理2002年9月24日)